

# 創立60周年の歴史と新たなる創造



株式会社 マツバラ

昭和25年各務原市那加東那加町にて操業を開始し本年で60周年を迎えました。本日ご臨席を賜りました、皆様はじめ多くの人と企業に支えられての60年に心から感謝を申し上げます。

60年を機にマツバラの歴史を振り返り、今後当社が目指す方向性について発表させていただきます。しばらく、ご清聴いただけますようお願い申し上げます。

# 創業当時の現場の姿

②



## 土間込め アイロンの本体を手込みで造型

昭和25年、創業当時、職人さんの手による受取り式の手込みで型を造っていました。この型を造る作業を造型といいます。

この当時は、熟練された大ベテランの職人でも、1日80枠程が限度で、一日の生産量は今の100分の1でした。



# 創業当時の現場の姿



## 注湯作業 手柄杓にて注湯

職人が自ら造った鑄型に、自分で溶湯を流し込み、合格製品のみがカウントされる仕組みとなっており、当時の鑄物工場は職人仕事が主流でした。

# 県下初のプラント工場



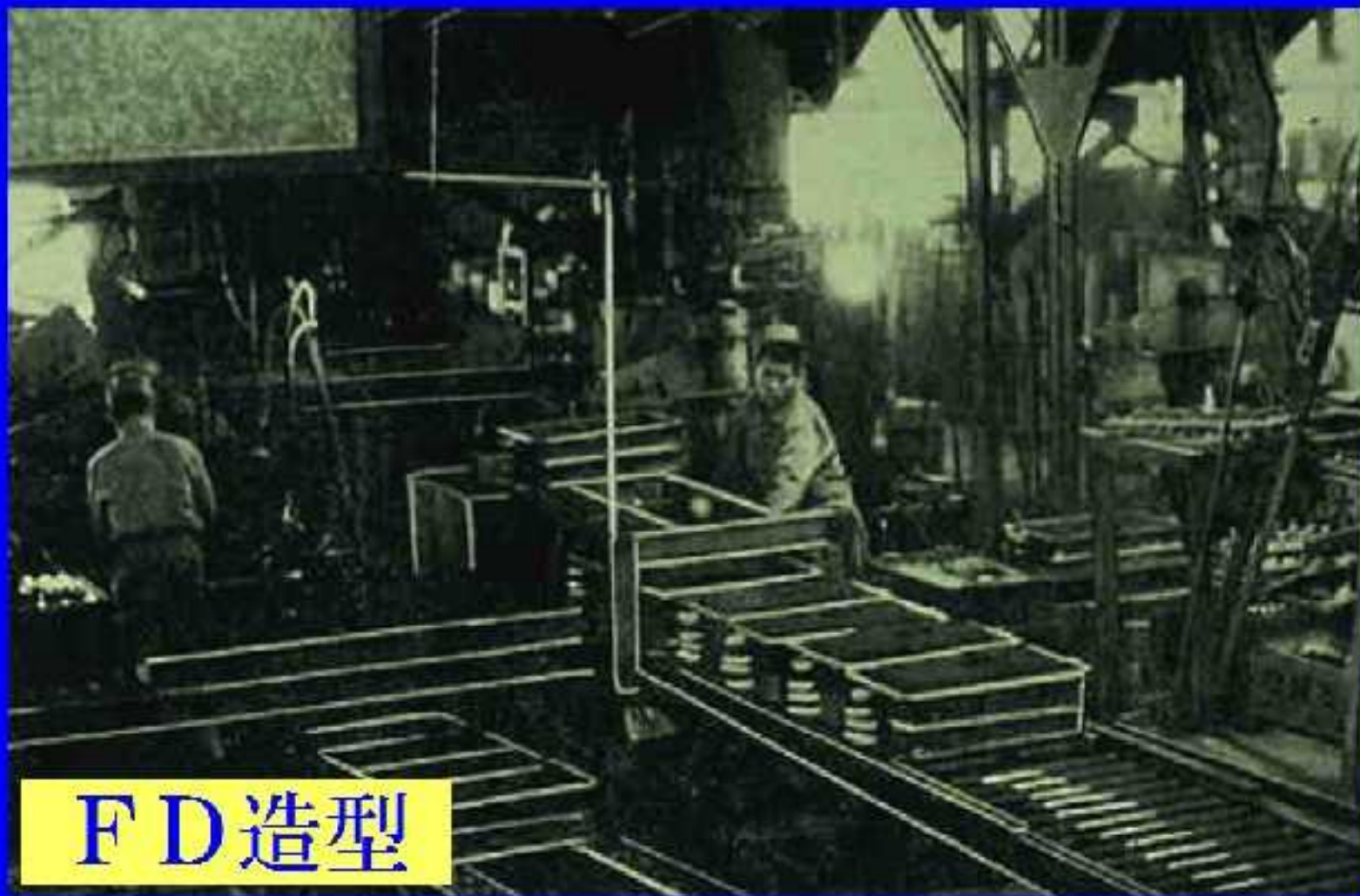
高度成長の時代に入り、職人さんの手込み造型から、F1機械込みへと生産体制を変更が求められました。見習いの養成工でもF1造型機1台で80枠は造型可能となり、昭和36年 県下初のプラント鑄造工場の操業を開始致しました。それにより、生産量は5倍の、月産200トン体制へと成長します。





## F1 造型

F1 10ラインのパレットラインで生産を開始したものの、溶解能力に追いつく造型が出来ず、せっかく溶かした鉄が製品にならないという、大変非効率な時代を送る事となります。この時の経験が、溶解能力の1.5倍の造型能力を持つ、現在のモデルとなり、業界平均の2倍の生産性を当社が有する礎となりました。



## FD造型

時代は更に大量生産、大量消費の時代に入り、全ての産業でオートメーション化が求められ、当社でも、F1造型からFD造型への変更を決定しました。

FD造型は、非常に生産性が高く、全くの素人でも、僅かな経験で造型可能なラインでした。最終的には、FDラインを4ライン設置し、生産性は2倍の400トンへと向上し、溶湯とのバランスも改善され、効率的な生産が出来るようになりました。





## FD注湯ライン

FDラインも改善と改良を加えて、独自の生産ラインと呼べるほどになり、最終的には機械とラインを社内で作り上げるまでになり、設備投資を押しえ生産性を大幅に向上させ、当社が急成長を遂げる原動力となりました。



SMライン



セキ折りライン

自動車産業の急激な伸びに追い付くために、自動車のウォーターポンプ羽根の生産を縦型のSM自動造型機にて開始いたしました。又、セキ折・バラシ工程のラインも増設いたしました。

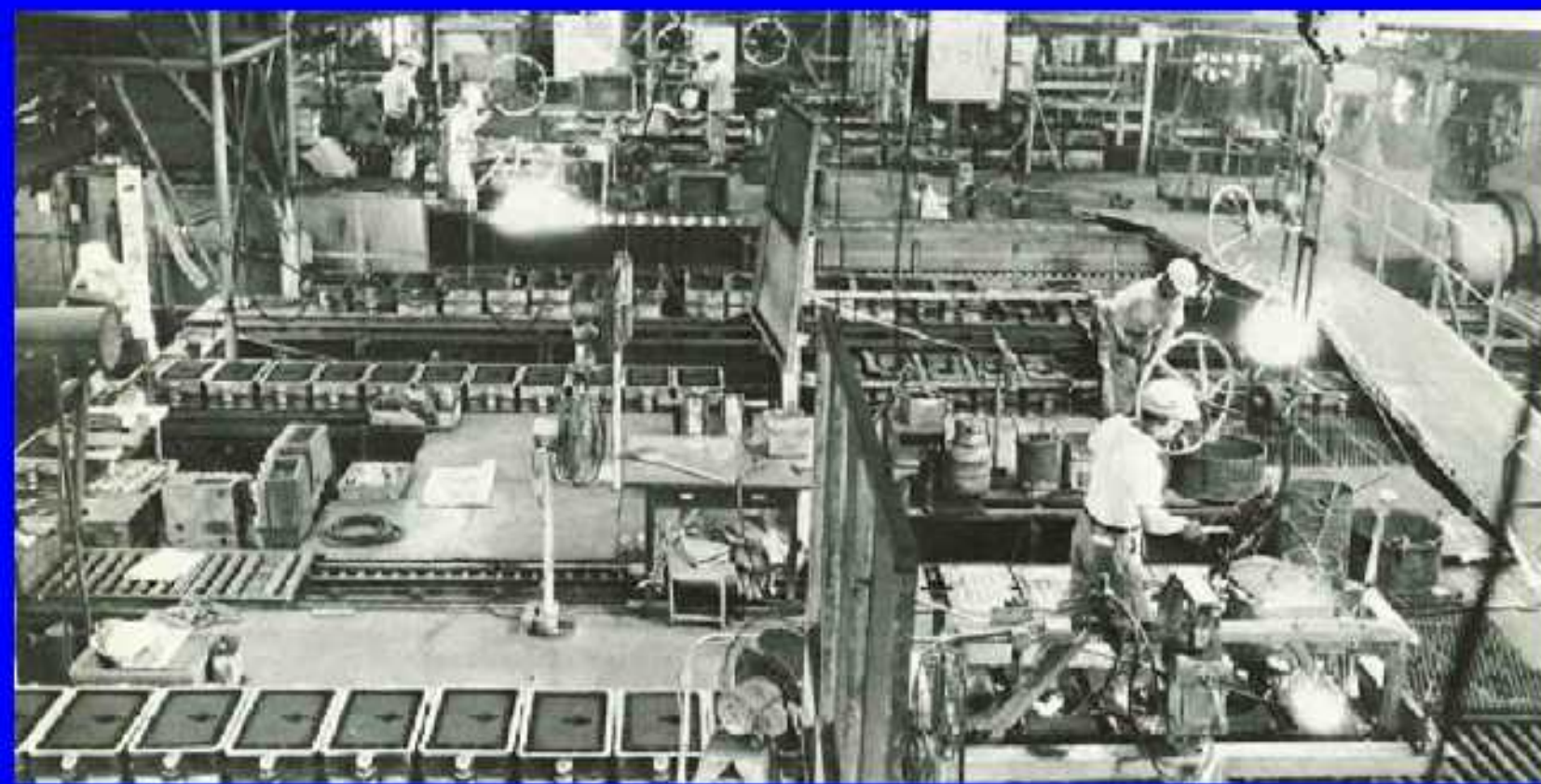




## RMB 2016ロートマッチ ブロマチック4ステーション自動造型機

その後、農業機械や、ボーリングブームによるボーリング場の急激な伸びにより、その軸受けとなる、ピローブロックが当社の主力商品となっており、横型のRMBラインも増設いたしました。

時代の流れにより、鋳物工場は職人職場から、装置産業へとシフトされました。



# 注湯ライン

マツバラの各務原工場 最終の注湯ラインの姿です。

SM 3ライン、RMB 1ライン、FD 3ライン、F1 1ラインの造型ラインで月産800トンを達成する事が出来ました。創業当時の40倍の生産量です。





振動・騒音・粉塵・汚水・産廃・大気汚染等、鑄物工場が3Kの代表産業と言われていました時代、特に初代社長松原啓吉(けいきち)が各務原市長であったこともあり、多くの近隣住民の皆様から、「あなたの会社から公害を無くして下さい」との声が高まり、将来的には二交替を目指し、二度と近隣に住宅の建たない場所を求め、同時に二度と公害で近隣に迷惑をかけない工場を目指し、関市への移転を計画致しました。